

ロシア帝政末期の茶と社会運動

森 永 貴 子

序

こんにちロシアの国民的飲料と見なされる茶は、アジアからヨーロッパに伝播した代表的嗜好品の一つである。ロシアは中国の隣接国家として17世紀半ばから国交を結び、これに先立ちモンゴル諸侯経由で茶を知ったことが記録されている。しかし、茶を受容したロシア上流層は、イギリスなど西ヨーロッパ経由で運ばれた茶を好んだことも指摘されている¹⁾。この背景には茶の受容における文化的な違いがある。中国に近いシベリア（アジア・ロシア）ではブリヤート人などのアジア系先住民に喫茶慣習があったが、彼らが消費したのは主に「磚茶」だった。一方、ヨーロッパ諸国が中国から受け入れたのは白毫茶²⁾を中心とする「茶葉」であり、ロシア上流層もヨーロッパで流行した「茶葉」を煮出す喫茶方法を受容していった。貴族や大商人が居住するサンクトペテルブルクでは、茶とともにヨーロッパ式の茶器やテーブルウェアが販売された³⁾。これに対し、東シベリアの先住民はレンガのように固められた磚茶を削って熱湯に入れ、岩塩などを混ぜてスープのように煮出して飲むのが伝統的であり、18世紀までのロシア人にとってなじみのある飲み方ではなかった。

茶の受容に関してアジアとヨーロッパの文化的差異を内包しつつ、茶はキャプタ貿易の輸入品目として18世紀末から急増した。しかし「白毫茶」を中心に高関税が賦課されたため、しばらくは庶民の手に届く価格ではなかった。ただし高関税がかけられた白毫茶に対し、磚茶は比較的関税率が低く設定されたため、当初はシベリア商人、特にザバイカリエ地域（バイカル湖東部）の新興商人が磚茶を中心に買い付けるようになり、それらは先住民に販売された⁴⁾。白毫茶を中心に買い付けたのはモスクワ商人などの資金豊富なヨーロッパ・ロシア地域の商人だった。シベリア先住民はたとえ高額でも借金をして「財産を使い果たすまで」磚茶を購入したと同時代人に指摘されており⁵⁾、長い喫茶伝統から見ても、ヨーロッパの人々と異なる嗜好を持ち合わせていた。従ってロシア上流層への喫茶慣習定着は中国市場との隣接条件ではなく、ヨーロッパ、とくにイギリスの文化的流行の影響が大きかった。

茶は19世紀を通じロシア上流層だけでなく中下層の人々にも好まれるようになった。その過程にはいくつかの段階があるが、少なくとも歴史学研究の対象として、帝政ロシア時代の茶消費に関する詳細な検討は1990年代まで行われなかった。これはロシアの茶貿易史研究が国家の統計データを中心とする政治経済史研究に特化し、社会史的・文化史的側面からのアプローチが周縁的なものと見なされていたこと、19世紀前半は茶の高価格による密輸・偽造茶が横行し、残された史料も限られることなどに起因しているだろう。

しかし近年H.A. ソコロフをはじめとする若手歴史家がこの問題に関して積極的に史料整理を進め、文化的側面を含めて新たな視点から「ロシアの茶」を検討し、その成果を刊行している⁶⁾。彼らの研究が新たに示すのは、19世紀ロシアにおける茶消費拡大が茶の海路輸入実現や、関税引き下げなどの政策に影響されていただけでなく、同時代の社会変動やアルコール消費問題とも密接に結

びついていたという事実である。

筆者はこれまで17世紀以降のイルクーツク商人とキャフタ貿易について研究し、毛皮貿易業者の家系と茶貿易業者の家系の繋がりについて指摘した⁷⁾。そこからさらに進んで19世紀におけるモスクワ商人の茶貿易とキャフタ貿易への影響、瑛瑋条約(1858)以降におけるロシア商人の漢口進出と製茶業などについて検討してきた⁸⁾。

一般に、ロシアの労働者階層への茶の浸透は1860-70年代頃と説明され、これは1861年の農奴解放令と、1862年にロシア西部国境およびすべてのヨーロッパの港からの茶の輸入を承認したことが重要な要因とされている⁹⁾。それと同時に、ロシアにおける茶の関税率はヨーロッパ諸国と比べて最も高く、茶の価格に反映されていた事実がある。このような条件下でロシアの茶消費が拡大し、革命前夜のロシアがイギリスに次ぐ世界第2の茶の輸入国であったことは¹⁰⁾、貿易政策の変化による影響だけでは説明できない。例えば、1915年から1917年にかけての中国、漢口における各国関税負担額のデータを参照すると、1915年はイギリスが第1位に対し、ロシアが第4位で、しかもロシアはイギリスの関税額の8分の1程度しかなかった。ところが第1次世界大戦末期の1917年にはロシアの関税負担額がイギリス、日本に匹敵する規模に急増した¹¹⁾。これは大戦期における茶の輸入増大が関係していると推測される。

本稿では、帝政ロシアにおける茶の消費拡大と連動した同時代の社会変動について、19世紀初頭からの農民の潜在的な需要、19世紀半ばの酒税引き上げに対する農村禁酒運動、この問題と結びつきがある19世紀末-20世紀初頭の禁酒運動、軍隊における茶の奨励を中心に検討し、ロシアにおける茶の需要変化を消費者の視点から検討を試みる。その上で、茶の高関税や高価格という悪条件にもかかわらず、ロシア社会全体に茶が浸透するようになったのはなぜか考察する。

今回上記の問題を検討するに当たり、近年刊行されているロシアの禁酒運動史研究を参考にした。特にA.И. アファナシエフによるウラジーミル県を中心とする禁酒運動の事例は「禁酒協会」および「喫茶協会」の関係についても言及しており、非常に示唆に富むが、今回現物は入手できなかった。ただし現在、彼の著書はロシアのアルコール撲滅のための情報サイトで全文公開されており、こちらを参照することができた¹²⁾。本稿では他にもインターネット公開されている新旧の論文を多く参照したが、可能な限り1次史料や2次文献と比較しながら考察を進めていく。

1. ロシア農村の茶消費と偽造茶問題

1-1. 喫茶の広まりとサモワール

ロシアの喫茶と言えばサモワールが有名であるが、その製造が始まったのは18世紀以降であり、比較的歴史が浅い。にもかかわらず、サモワールはロシアにおける喫茶文化の成立と深く関わっており、象徴的な存在である。

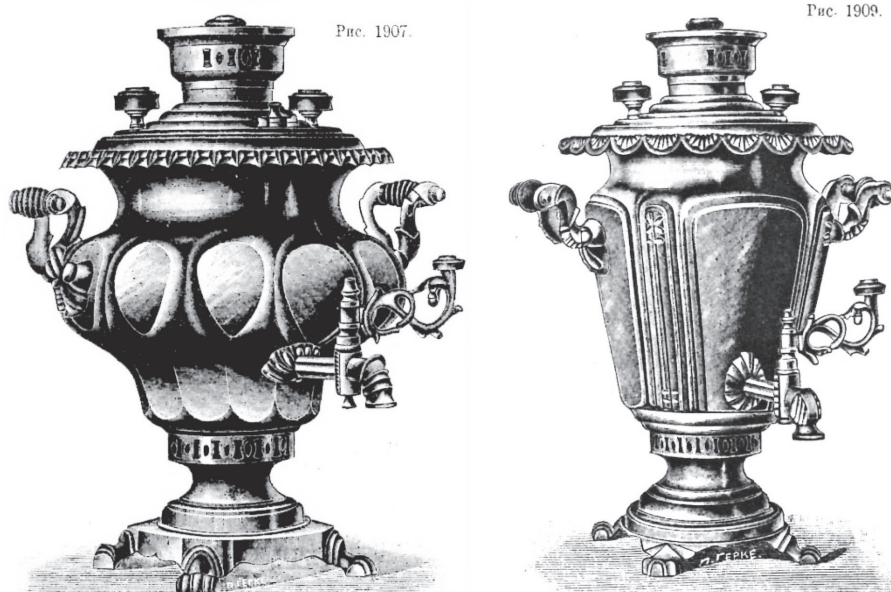
サモワールは高価な金属製品であり、これを各家庭に1台持つことは、18世紀の農村では不可能だった。サモワールの語源は「自動湯沸かし器」であり、特徴的な形状をしている。一般的なものは、中央部分に炭を焼くための空洞があり、その周囲にさらに水をいれるための空洞部分がある。上部に向かって煙突状の筒が張り出しているものや、茶葉を入れた容器や急須を設置する場所がしつらえられたものもある。また側面には持ち運ぶための取っ手と、沸騰したお湯を注ぐ蛇口がある。し

かし最初からこの形状だったわけではない。サモワールの原型であるやかんなどの茶器はウラル鉾山に設立されたデミドフらの工場で製造を開始し、初期の銅製茶器は1730年代に生産された。これらはヨーロッパで見られる通常の水差し、やかんと形状が変わらなかった。「サモワール」という言葉の初出は『1745年に製造され貴族グリゴリー・アキンフィエヴィチ・デミドフに渡された様々な名称の銅製食器の数とその販売価格に関する一覧』という文書であり、別文書には「管がついた青銅製のサモワール2個」のことが書かれている。管とは注ぎ口のこと、この時期の「サモワール」は一般的形状の「やかん」を指した¹³⁾。

ロシア食文化史の専門家スミスとクリスチャンは、ヨーロッパで初期に使用された「ブリオトカ бульотка」(フランス語の bouillotte、真鍮製の底部で炭を燃やして加熱するやかん)ではなく、18世紀初頭に製作されるようになった蛇口のついた湯沸かし器がサモワールの起源ではないかと推測する¹⁴⁾。現在のサモワールの形状になったのは1770年代と考えられる。



写真1：1760年代にウラルのデミドフ工場で製造された初期のサモワール¹⁵⁾。初期のサモワールは19世紀に製造されたものよりもデザインがシンプルである。



(左) 図1. 花瓶 (ヴァーザ ваза) 型サモワール。(右) 図2. リュムカ (рюмка ウォッカなどを飲むための小型グラス) 型サモワール。いずれも19世紀末—20世紀初頭のカタログに掲載された図版¹⁶⁾。サモワールは他にも多様なデザインがある。

1778年、ロシアで最初のサモワール製作所がトゥーラという伝統的な銃器製造都市で設立された¹⁷⁾。このような湯沸器は一般家庭では珍しく、貴族層や富裕層の家庭でしか見られなかった。しかし富裕な人々が茶を飲むようになると、彼らは旅行先でも茶を求めるようになった。当時ロシアの駅通町（ヤムスカヤ・スロボダー Ямская слобод 馬を替えることのできる場所）には必ずしも居酒屋や宿がなく、駅通間の距離は18-25 ヴェルスト（≒18-25km）あった。そこでお茶好きな人々は旅行に持ち運びできる簡易サモワールを携帯した¹⁸⁾。貴族地主やロシア国内の商品買付を生業にする商人たちはしばしば遠方に旅行した。特に18世紀後半から19世紀にかけて、ヨーロッパ・ロシアから東シベリアまでを結ぶロシア帝国全土の流通網が形成されたことは、遠隔地の商用旅行を活性化させた。それと同時に、茶が主要街道沿いの農家にも入り込んだ。サモワールは、茶を携帯する旅人をもてなす上で重要な家庭用品になっていった。

1839年のロシアに関する紀行文を書いたフランス人キュスティン侯爵 Marquis de Custine (1790-1857) は、ロシア人の喫茶について次のように述べた。「ロシア人は、最も貧しい者でさえ、家に茶器と銅製のサモワールを持ち、朝な夕なに家族で茶を飲んでいる」¹⁹⁾ ヨーロッパの社交的喫茶慣習を知るキュスティンにとって、貧しいロシア人家庭でサモワールを備えて喫茶する様子はみすばらしく見えたらしい。また彼は、農民層へのサモワール普及が1812年のフランス軍によるモスクワ侵攻よりも前だったと述べている²⁰⁾。一方、帝政時代の経済史家でロシアの茶貿易史研究書を刊行したA.П. スポーチンは、ロシアでは茶そのものより「サモワールの方が早く普及した」と主張している。彼はその上で、1843年当時の主要街道沿いに茶が普及し、しっかりした農家ではますます茶が好みの飲み物になりつつあるというドイツ人経済学者A.F. フォン・ハクストハウゼン男爵 (1792-1866) の証言を引用している²¹⁾。

このように、19世紀の比較的早い時期に農村生活とサモワールは結びつき始めていた。アレクサンドル2世の大改革以降、多くの農民が職人・労働者として都市に出稼ぎに行くようになるが、彼らはモスクワに来ると、自分好みに茶を入れる居酒屋や食堂に通った²²⁾。ロシア商人、農民が好む喫茶とは、品質の良し悪しに関係なく濃い茶を入れてもらい、客人として敬意を持ってそれらを振舞われることだった²³⁾。

1-2. 偽造茶、代用茶の取り締まり

これらの証言を考慮すると、ロシア農村部では19世紀初頭から茶への欲求が高まっていたことは間違いない。しかしすでに述べたように、高関税政策から茶は非常に高価であった。このため生じたのが、密輸と偽造茶の問題だった。

偽造茶には、茶ではないものを茶と称して販売したり、出がらしのものに色をつけて新品のように見せかけたり、混ぜ物をしているものがあった。そのなかに、ヨーロッパ・ロシア地域に自生するハーブの一種であるヤナギラン（キブレイ кипрей）の茶があり、葉を採集して本物の茶そっくりに加工できるため、農村部で代用茶として広まり、カポルスキー・チャイ капорский чай、またはイヴァンの茶（イヴァン・チャイ Иван чай）と呼ばれた。この代用茶を含む偽造茶問題は1820年代には発生し、行政文書に上っていたらしい。その背景に高関税政策とキャフタ経由の遠隔陸路輸送コストの問題があった。1800年規則、1812年の追加課税による茶の関税額は、種類に応じて重量に基づき規定された。例えば緑茶は1フント（≒409.5g）当たり47～75コペイカ、紅茶は60コペイカであり、磚茶は6コペイカであった²⁴⁾。

19世紀前半にヨーロッパ・ロシア地域の商人が緑茶・紅茶を、シベリア商人が磚茶を中心に買い付けた原因は、上記の茶の種類に基づく関税格差にあった。茶を買い付けるには関税を支払うための十分な元手が必要であり、ヨーロッパ・ロシア地域の主要茶商人がモスクワ商人だった。そのためロシア政府は1826年に茶の再輸出に限り関税還付制度を導入した。これにより、ロシア商人はキャフタ経由でライプツィヒ、ハンブルク、アムステルダムへ中国茶を再輸出することが可能となり²⁵⁾、一方でイギリス船でヨーロッパに再輸出され、ロシア西部国境から密輸入された広東茶と競合した。しかしロシア国内の茶は依然高価であった。農民層はこれに抗して代用茶を製造し、購入したのである。地域によっては農村の大きな産業となっていたらしい。ここで、ペテルブルクの国立歴史文書館(РГИА)に保存されている偽造茶摘発に関する公文書資料の一部を参照する²⁶⁾。

1845年4月11日、30日、財務省・工業貿易課宛の文書で、モスクワとペテルブルグにおける茶の「汚職」に関する調査委員会設置と、その委員をロシア・アメリカ会社支配人²⁷⁾、キャフタ商人の代表から選出することが通知された²⁸⁾。茶貿易に実質的利害関係を持つ彼らは、茶の密輸・偽造の取り締まりを緊急課題とした。続く5月23日、サンクト・ペテルブルグの役人から財務大臣に宛てて、偽造茶が見つかったこと、農村でこれらが広く製造されていること、調査がサンクト・ペテルブルグ、トヴェリ、モスクワ、ウラジーミル諸県で続けられていること、茶が高価なため陸海(バルト海、フィンランド経由)両方のルートで密輸されていることを報告した。

また同年6月20日付けの内務大臣から財務大臣宛ての報告では、カザンでヤナギランの茶が見つかり、それらがカザンからシベリア街道にわたり浸透していること、タタール人村で偽造茶製造所が発見されたことが書かれている²⁹⁾。従来の捜査でも「製造所の摘発」はできなかなただけに、この発見は快挙だった。偽造茶製造がロシア人居住地域だけでなく、カザンのようなタタール人居住地域にまで広まっていたことは、帝国の広い範囲で代用茶の消費需要が拡大していたことを示している。

こうした偽造茶問題は茶の輸入量が増加した1810年代より後に起こっている。にもかかわらず問題発生から1845年の調査委員会設置まで20年近い年月がかかったのは、取り締まりが非常に困難だったからだろう。一方ロシアの人々が「薬」としてではなく、嗜好品として日に何回も茶を飲むようになったのは1840年代だという指摘もある³⁰⁾。つまり偽造茶横行はキャフタ茶需要の高まりと、「本物のキャフタ茶」を購入できないロシアの貧しい消費者層の妥協の産物と考えられる。

1850年3月16日には、財務省が偽造茶防止措置の提案文書を提出し、承認された。この中で偽造茶を製造・販売した者への厳格な処分が規定され、これに加えて偽造茶の摘発を市警察、商取引代表に委任すること、ロシア・アメリカ会社、キャフタ商人の中からこの問題に関わる人物を任命することが記載された³¹⁾。その後太平天国の乱の余波で1853年に茶の輸入激減という危機的状況を経て、キャフタにおける金銀決済と関税引き下げが一部実現化した³²⁾。

2. 酒専売制度と農村禁酒運動の発生

前節で農村と茶の結びつきを説明したが、19世紀前半のロシアで茶は高価な贅沢品だった。農村に古くから伝わる飲み物としては、ベリー類を絞った天然果汁飲料のモルス、ないしは、はちみつやハーブ、スパイスを混ぜて作るズビーテン、ライ麦・大麦・小麦などを発酵させて製造した低ア

ルコールの発泡飲料クワス（一種のエール）や蜂蜜酒などがある。特にクワスと蜂蜜酒は古代のキエフ・ルーシ時代から親しまれてきた。

蒸留酒のウォッカがいつロシアに伝わったかについてははっきりしない。14世紀末とも言われるが、西ヨーロッパからロシアに入ってきたことが特定できるのは16世紀とされる³³⁾。しかしこれは傭兵など限られた人びとの消費であり、当時リトアニア人やドイツ人などの外国人を通じてビールや蜂蜜酒とともに販売された。

農村において茶は後にアルコールに取って代わっていったが、それ以前に農村の茶消費を妨げたのは高関税・高価格であった。しかしこれについてはアルコールも同様であり、特に19世紀までウォッカの販売は政府の独占事業だったため、特定の居酒屋でしか販売されなかった。一方、ロシアのアルコール問題の専門家は、ロシアで飲酒が社会問題化したのは19世紀と見る。現在までロシアのアルコール依存は男性死亡率の高さ、短い平均寿命も含めて健康上の深刻な問題であるが、その起源は19世紀と推測されているのである³⁴⁾。19世紀後半の作家・社会運動家であるИ.Г. プルイジョフの『ロシアにおける居酒屋の歴史』（1868）は後世に高く評価されているが、その評価は同時代のアルコールを巡る貧困層の教育の欠如、彼らの文化への知識人の関心、慈善事業の活発化、禁酒運動という社会史的な文脈の中で理解される³⁵⁾。

ここで、ロシアにおける酒と専売の歴史を簡単に触れておく。ロシアでウォッカが販売されて間もなく、1533年（ヴァシリー3世治世最後の年）に国庫が運営する居酒屋が登場した。酒の専売と統制の試みはイヴァン4世（在位1533-74, 76-84）の治世にも続き、1590年代にはモスクワ大公国がウォッカを民間食事所などで販売することを禁止し、国庫の居酒屋（クルージェチヌイ・ドヴォル кружечный двор, カバーク кабак）でのみ販売するよう定めた。ウォッカ類販売は共同体選出の居酒屋の長、補佐人、宣誓役人（ツェラヴァリニク целовальники）が行い、酒税納入は彼らの請負となった³⁶⁾。

18世紀初頭、ピョートル1世（1682-1725）は北方戦争の戦費調達のためあらゆる財源を求め、酒税からも多くの歳入を得ようとした。そのため富裕商人の酒税徴収請負を強化し、あらかじめ現金で酒税を納入させ、納入できない場合は船の供出、戦争への協力を求めるなど、国庫に利益をもたらす制度を敷いた。また1716年には醸造業を自由化し、全醸造業者に課税したことで、原料の穀物を生産する農業従事者と、醸造業の結びつきが強まった³⁷⁾。

エカテリーナ2世（1762-96）は1765年、醸造権を貴族に付与し、これに伴い聖職者、商人、町人³⁸⁾、農民の醸造権を削減した。つまり農民が自分で酒を醸造できる手段が失われ、国庫販売所からウォッカを購入せねばならなくなった。一方、醸造特権付与により、貴族は所領経営のため醸造業を発展させ、醸造技術の向上、ウォッカの品質向上に寄与した。国庫醸造のウォッカは貴族領地産のウォッカのライバルではなく、事実上地主貴族提供のウォッカが国庫販売所（居酒屋）で販売された。このように政府は醸造権、徴税請負権を手放した結果、酒専売に対するコントロールを失っていった。そのため1781年に酒税局（カジョンナヤ・ピチェイナヤ・パラータ казенная питейная палата）を設立し、国庫による一定量のウォッカ生産と販売確保を目指そうとした。しかしこれも貴族の醸造業に押され、領地農民もその恩恵の一部を受けた。商人層は醸造業を許されなかったが、代わりに徴税請負という形で専売事業に関わった³⁹⁾。

その後も政権交代ごとに酒の統制が試みられたが、政府が再び国庫の専売事業を強化したのはアレクサンドル1世（1801-25）末期である。1819年、政府はシベリアを除くロシア全土のウォッカ製造を国庫独占とした。この時期に政府が強硬措置に転じたのは、ナポレオン戦争によるロシア経済

の壊滅的状況と徴税請負業の崩壊、酒税滞納額の増加が原因であった。事実、1801-1820年の滞納額は2億ルーブルに上った。醸造業特権を持つ貴族はその廃止に反発し、領地醸造所を維持した。デカブリストの乱のさなかに即位したニコライ1世(1825-55)は、貴族層との和解手段として、1826年に私的醸造業を一部許可した。だがいずれにしても、政府は専売制度を維持した⁴⁰⁾。

ちょうどこの時期、「ウォッカ問題」は財政、農業、公共道徳に関わる課題として政府の関心を引き付けるようになった。19世紀ロシアの貨幣経済浸透と流通網の拡大、農村部の居酒屋増加が、農民の飲酒を増やしたからである⁴¹⁾。酒専売の利益を得る主体が政府、役人、貴族であると同時に、酩酊-酔っぱらい(ピヤンストヴォ пьянство)、アルコール中毒が農民と労働者に影響し、公共秩序と経済への損失が懸念された。しかし国庫による酒の専売と税収の拡大は財政面で歓迎された。スミスとクリスチャンは『パンと塩』の中で金融大臣E.Φ.カンクリン(在任1823-44)の次の言葉(1826)を引用している。「・・・庶民の適度な飲酒の拡大は望ましいことである。というのも、農業が主要産業であり都市の数も非常に少ないような国では、穀物輸出が減少すれば、余剰穀物はそれを蒸留して使うほかないからである」⁴²⁾これは経済的利益を優先する政府の態度を端的に示している。

この時期「祝祭時に飲酒をする」農村の慣習が崩れ始めており、「適度な飲酒」は見られなくなっていた。ロシア政府は道徳問題に取り組むことなく、国庫収入のため酒の専売を維持し、密造・密売取り締まりを強化し、その結果これら業者との小競り合いがロシア各地、特に国境地域で頻発した。一方で醸造・酒販売の国庫独占は、ウォッカの著しい品質低下を招き、人々は質の低いウォッカに不満を蓄積させた⁴³⁾。

こうした酒専売制度への抵抗から1837-39年にはバルト海周辺で禁酒運動が起こり、政府に抑圧された⁴⁴⁾。しかしこの現象がより大規模に発生したのはクリミア戦争(1853-56)後である。政府は酒税廃止の訴えなど様々な問題が生じたにもかかわらず、戦費のため酒税を引き上げた。この結果、国有地農民たちが禁酒運動に取り組み、酔っ払いの蔓延に抗議すると同時に、これを放置して酒専売を行なう政府と、教会にも抗議を行なった。この禁酒運動は自然発生的側面があり、ソ連時代の歴史家フォードロフは運動発生年を1858年としている⁴⁵⁾。

禁酒運動の高まりから、1859年にリトアニアのコヴノ県でカトリック農民が禁酒協会を組織した。この動きはロシア諸県に広まった。こうした動きは酒の専売業者の利益を損ない、彼らが対抗措置としてさらに高値をつけ、1859年には政府に対して政府と教会司祭が禁酒運動を支持しないよう嘆願した。1859年5月、酒の高値に抗議して農民が居酒屋を襲撃し始めた。禁酒運動の持つ性格が暴力的になったことで、政府は徴税請負制度の廃止に踏み切らざるを得なくなった⁴⁶⁾。この現象は「酒一揆」と呼ばれている。

スミスとクリスチャンはフォードロフの論文「農民禁酒運動1858-1859」(1962)に依拠し、当時の禁酒運動で茶が提唱されることはなかったとしている⁴⁷⁾。しかし、19世紀前半のアメリカ、ヨーロッパにおける禁酒運動が喫茶の奨励と不可分だった事実と比較すると、ロシア農村の禁酒運動への疑問が残る。イギリスでは茶に高関税が賦課されていた1820年代から1830年代にかけ、各地で禁酒協会の設立と「節酒の茶会」が盛んとなり、従来酒を飲んで祝祭日などに、大掛かりな公共の茶会を催した⁴⁸⁾。高価な茶がアルコールに代わる飲料として奨励されたのである。

1858-59年にロシア農村で起こった禁酒運動において同様の動きがなかったのは何故か? 筆者はその要因をヨーロッパ、アメリカとロシアの社会構造の違いから来るものと考え。当時茶は農民にとって非常に高価であると同時に、茶の潜在的需要があるにもかかわらず、農奴解放以前の購買

層は限られていた。以下、ロシアの茶の関税率を参照する。

(表 1) ロシアの茶の関税率 (1 フント当たり、コペイカ) ⁴⁹⁾

年	キャフタ経由		ヨーロッパ国境経由	
	紅茶	磚茶	紅茶	磚茶
1800	17 1/2	2 1/2	—	—
1812	60 1/4	6 3/4	—	—
1841	60	6	—	—
1845	40	6	—	—
1861	15	2	30-35	5
1887	50	9	80	15-5
1891	50	9	80	25-5

この表で「紅茶」は白毫茶などの茶葉を指す⁵⁰⁾。ただし先述のように、「ヨーロッパ国境経由」の茶の輸入解禁は1862年であり、キャフタ商人たちはキャフタ経由の茶の輸入利益を擁護するため、ヨーロッパ国境経由の茶により高い関税をかけるという条件に合意した。同年茶の関税率は一時的に引き下げられた。農村禁酒運動はこの決定の3年前に発生している。しかしその後関税率は再び引き上げられた。さらに第1次世界大戦中、1915年に輸入された白毫茶は東部国境経由で1フント当たり63 3/4コペイカ、西部国境経由で78 3/4コペイカに上った⁵¹⁾。

上記の関税問題に加え、茶の新たな購買層を生み出す契機となった農奴解放令の発布は1861年である。社会的支持の点から見れば、当時の農村禁酒運動には聖職者がほとんど関わっておらず、時期的にも慈善運動や民衆への啓蒙活動はまだ活発化していなかった。しかし農村禁酒運動終息後も禁酒運動自体は水面下で続き、1870年代には労働者層に茶が浸透するよう、茶の効用が説かれ、奨励された⁵²⁾。1858-59年の農村禁酒運動は、ロシア社会がその活動を組織化させ、政府、他の社会層から支持を得るにはまだ時期尚早だったと言える。そこで次節では、19世紀後半に刊行された茶の解説書、啓蒙書などを手掛かりに、ロシアにおける茶の効用論争と、その奨励に至る変化について検討する。

3. 茶の社会的認知と嗜好の変化

3-1. 茶の害悪と薬効の宣伝

中国からヨーロッパに茶が輸入されるようになった時期の紅茶論争については、日本でも角山栄『茶の世界史』(1980)などを通じて知られており⁵³⁾、近年刊行された欧米の研究書でも紹介されている⁵⁴⁾。18世紀末までにヨーロッパでは「茶の害悪」「効用」についての論争が収束した一方、ロシアの知識人は19世紀後半における医学の発展とともにこの問題を論じた。彼らの論争の焦点は何だったのか、茶の専門書を手掛かりに参照する。

茶の効用に関する情報は西ヨーロッパからロシアに入ってきた。それらは茶の歴史的、地理的、経済的問題を論じた専門書において具体的に紹介された。その初期のものの一つがИ.ルジャノフ編『中国茶：その詳細な記述・・・』(1856)である。この中でルジャノフは茶の成分について次のように解説している。「茶には様々な割合で以下の成分が見出される。水溶性物質、タンニン、アルカロイド、テイン、もしくはカフェインが茶にあり、コーヒーにもある。揮発性油脂が茶に心地好い香

りを与えている・・・」⁵⁵⁾

カフェインはドイツの F.F. ルンゲ (1794-1867) によって 1820 年に発見されたコーヒーの成分で、1827 年には茶からも発見された⁵⁶⁾。ルジャノフは著書の中で、茶の化学的成分を紹介しつつ、ヨーロッパの商人たちが茶の利益を得るために医師を買収し、称賛させた結果、論争が起こった事実を述べている。にもかかわらず、彼自身は茶が有害かどうかの疑問に対し、茶は血行を良くし、落ち着かせるだけでなく、消化を助け、活力を増進するといった効能を列挙している。さらに茶が肥満を解消し、眠気を吹き飛ばす効果がある、とも述べている。その一方、質の良い茶を常備すべきことも付け加えている⁵⁷⁾。

総じてルジャノフは茶を肯定的に紹介し、どのような茶を飲んだら良いか説明している。「質の良い茶」を常備するよう主張するくだりは、同時期のキャフタ貿易の金銀決済実現と、海路経由の広東茶密輸に対する論争を想起させる⁵⁸⁾。

ロシアでは 1871 年に初めて広東から黒海のおデッサ港に正式な茶の輸送船が到着した。このことが、労働者への茶の浸透に弾みをつけた。その後まもなく刊行された A.H. フレプトフ『茶: 歴史地理学的・植物学的・物理学的関係・・・』(1873) でも、茶の効用を紹介している。その中で明末の混乱期に中国へ渡ったイエズス会士マルティノ・マルティニ (1614-61) の証言を挙げ、当時の中国人が茶は痛風や結石を治癒すると信じていたこと、吐き気・消化不良を治癒し、不摂生による結果を取り除くとされていたことに触れつつ、フランス、イギリス、オランダの医師が茶を称賛した歴史を紹介している⁵⁹⁾。

またフレプトフは、オランダ系のドイツ生理学者ヤコブ・モレスコット (またはモレシヨット、1822-93) の意見として、「茶は決断力を与え、コーヒーは日常に明白さを与える」という言葉を記している。他にもイギリスの軍医パークスの意見として、神経系への刺激と回復作用に触れていることを紹介し、茶の有益な特徴に関するジョンソンの言葉も引用している。以下はジョンソンの言葉である。「茶は酪酊を引き起こすのではなく、活力を与える。茶は神経系の働きを強め、眠気を払う。従って茶は夜の仕事や、頭脳を多く使って仕事する人々にとって有益だ。茶は血流システムを落ち着かせる。これにより、茶が炎症にもたらす薬効が説明される。この結果茶は頭痛に対する治療手段と見なせる。神経に対する茶の刺激作用がアヘンからの良い解毒剤となる。なぜなら後者(アヘン)は神経系を麻痺させるからだ」⁶⁰⁾

フレプトフの説明は、ルジャノフが説く茶の効能を踏襲しつつ、最新医療や公衆衛生に基づくヨーロッパの医学権威たちの意見を紹介している。つまり当時の茶の効能に関する見解は専らヨーロッパからロシアにもたらされた情報だった。フレプトフの記述からも、こうしたヨーロッパ医学の見解に基づく茶への好意的態度が見て取れる。

しかし一方で茶に対する否定的意見も存在した。A. II. ウラジーミロフは『茶とその肉体的健康に対する、もしくは心理的・道徳的・経済的害悪』(1874) の中で、茶がもたらす「害悪」を強調する。同書は医学的分析というよりも社会倫理的意見として茶の害を主張した本で、ロシアにおける茶の浸透を認めつつ、茶が肉体労働、知的労働において怠惰をひき起し、急激な「高揚」によって軽薄なおしゃべりをするようになる、と断じている。ウラジーミロフに言わせれば、茶によって生まれる文学作品などは全て無駄であり、エネルギーの高揚すらも砂上の楼閣のようにすぐ夢散してしまうものである⁶¹⁾。彼にとって特にゆゆしき問題は、茶を消費することで中国人に直接、またはイギリス人を通じて間接的に金を送ることになってしまうという「経済的害悪」そのものである⁶²⁾。彼

は当時の食の問題を扱ったプロパガンダ的著作を複数刊行しており⁶³⁾、その主張もイデオロギー的性格が強い。茶が労働者にも浸透しつつあった当時の状況から見て、彼の主張はいささか主観的に見える。

だが上記のウラジーミロフの見解は、裏を返せば当時ロシアの茶消費が増大してきた実態を反映していると言えるだろう。このことは露清の茶貿易における事業形態の変化とも連動していた。そしてウラジーミロフのような例外的意見を除いて、その後刊行された専門書では茶の効用が繰り返し強調された。経済学者のスポーチンも、茶が胃カタルに効果があるといった薬効の説明を踏襲しつつ、カフェインが無害であると説明している⁶⁴⁾。

3.2. 漢口のロシア人製茶業者と茶消費の拡大

1861年以降ロシア商人は中国の漢口に進出し⁶⁵⁾、湖北省崇陽で製茶業を本格的に開始して、「オボーリン・トクマコフ商会」をはじめとする製茶会社を設立した(1863～)。これら製茶工場は1870年代にかけて磚茶生産を増やし、イルクーツク税関経由でロシアの磚茶輸入を増加させ、1869年にその生産量は19万8387プード(≒3,249.6t.)に達した⁶⁶⁾。これによりロシア人の茶消費は従来白毫茶偏重だったのが、徐々に磚茶消費の嗜好が目立ってきた。これらの工場はやがて、屑や枝を取り除いて茶葉を圧搾できる磚茶生産に適したイギリス製機器を導入し、中国人労働者を雇用することで製茶技術の近代化に成功し、旅行に携帯便利な小型の「タブレット茶(プリトーチヌイ・チャイ плиточный чай)」⁶⁷⁾を開発した。

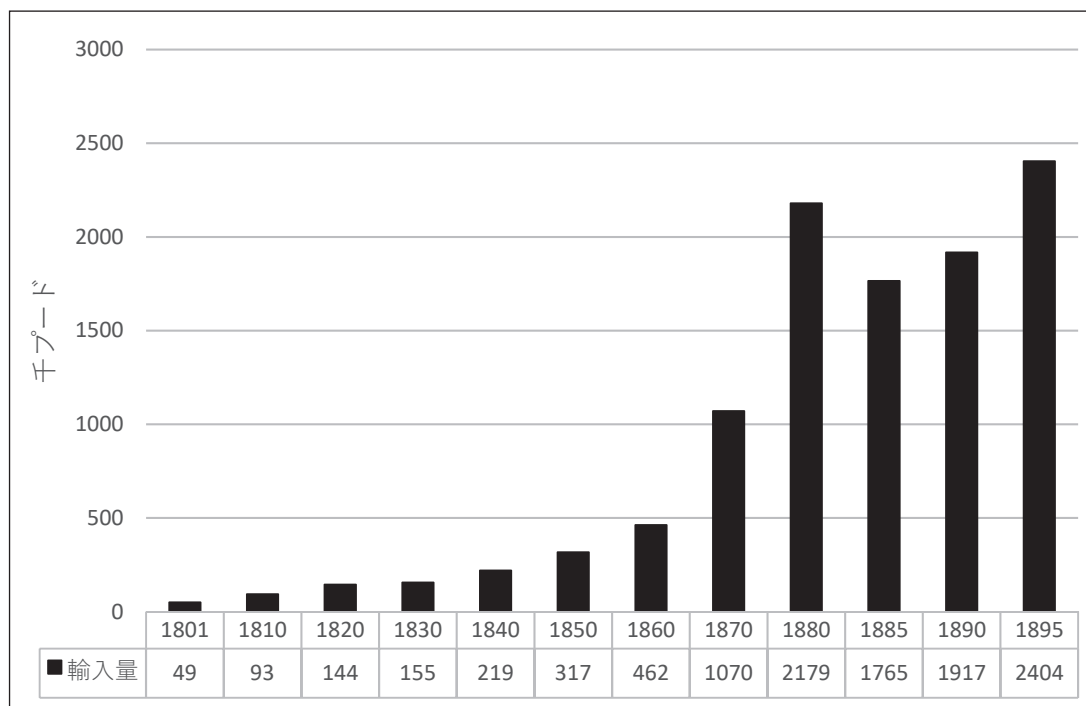
漢口駐在ロシア副領事も務めたП.А.ポノマリョフ(1844-83)は、Н.П.ロジオノフ、И.С.ハミーノフの製茶会社に入り、1871年にイルクーツクから漢口へ移住した。彼は1878年に上記の最新イギリス製機器の情報をモスクワの茶貿易業者А.トラベズニコフから入手し、ロンドンを視察して漢口の工場にこの機械を導入した。これにより生産されたタブレット茶は1880年からロシア市場に登場し、人気となった。ポノマリョフは1882年、この機械で生産したタブレット茶の宣伝パンフレットを刊行しており、これに軍の調査結果と軍医アカデミー教授А.ボロディンの推薦文を添付した。このうち、1882年1月13日付け大本营回状第14号には以下の説明がある⁶⁸⁾。

「大本营回状 1882年1月13日第14号：

中華帝国の漢口において、事前に葉を蒸すことなく乾燥製法により茶を緊圧する工場を持つイルクーツク第1ギルド商人パーヴェル・アンドレーヴィチ・ポノマリョフは、通常消費される茶葉の代りに、彼が用意した板状圧搾茶〔=タブレット茶〕、フント当たり1ルーブル18コペイカのものを、軍の部隊、軍事病院、軍教育機関で利用することを提案した。

上記の茶のサンプルは主計局技術委員会において検分・調査され、またプレオブラジェンスキー親衛隊、第85ヴィボルク歩兵連隊でも試験された結果、以下のような結果が出た。a)ポノマリョフのタブレット茶は長さ3ヴェルシヨク(≒13.34cm)、幅7/8ヴェルシヨク(≒3.89cm)、厚さ1/2ヴェルシヨク(≒2.23cm)で、板の上下表面にはその厚さの1/3の深さの溝が横断して8個に分割され(それぞれ重さが3ゾトニク〔≒12.6g〕)、簡単に割ることができ、粉末化した均質質量の茶葉でできている。・・・6)主計局技術委員会で行われたポノマリョフのタブレット茶サンプルの化学的・味覚的調査によると、フント当たり1ルーブル20コペイカから1ルーブル80コペイカの茶葉や、東シベリア軍管区で消費される磚茶と比較し、ポノマリョフの茶は品質的に1ルーブル60コペイカ以下の磚茶や様々な茶に引けを取らないことが分かった。・・・」

この調査から、主計局技術委員会はポノマリョフの茶が質・価格ともに消費、保存、輸送に有益であるとの見解を示した。この件は製茶業者であるポノマリョフ側から政府に働きかけたとはいえ、すでにこの時期からタブレット茶を軍が消費するメリットについて検討され始めている。軍隊における茶の奨励が本格化するのは20世紀初頭であるが（次節参照）、一方でロシア人製茶業者による磚茶、タブレット茶の生産はロシアへの茶の輸出を促進したと考えられる。ここで、19世紀後半におけるロシアの茶の輸入データを参照する（グラフ1）。

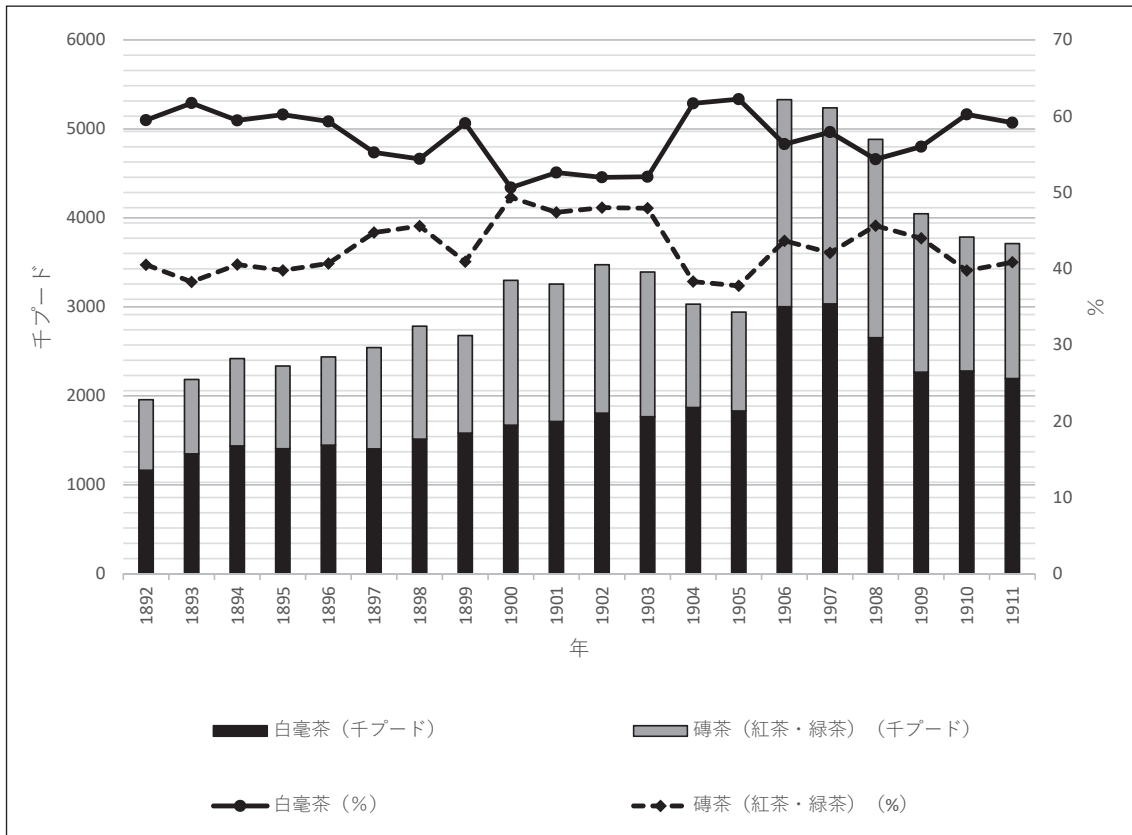


グラフ1 19世紀ロシアの茶の輸入量

出典：Ст. О.Гулишамбаров, *Всемирная торговля в XIX в и участие в ней России*, СПб., 1898, С.36.

グラフ1が示すように、1860～70年代を境に、ロシアの茶の輸入量はキャフタ貿易の輸入が限定されていた19世紀前半とは比較にならないほど増加した。これは茶の海路輸入解禁（もしくはそれに伴う「密輸茶」の法的許可と、それまで隠れていた輸入量の政府統計への反映）によるものであることはもちろんだが、この中にはロシア人製茶業者が中国で生産してロシアに運んだ茶も含まれている。1880年から1885年には輸入が減少しているが、これは西部国境からの茶の関税が再び引き上げられたこと（その代りイルクーツク税関経由の陸路輸送の茶については関税が引き下げられた）が直接的原因と推測される。モスクワ商人が1878年に資金を出し合い組織した義勇艦隊（Вольный флот）の輸送分も含め、全体的に海路経由による茶の輸入は増加傾向だった。

1889年にロシアで刊行されたドイツの農学者、ヘンリー・ゼムラーの『茶、中国・インド・日本・コーカサスにおける割り当て。・・・』は、ロシアで白毫茶1200万フント（＝30万プード、約4,914t）、磚茶1700万フント（＝42万5,000プード、約6,961.5t）を消費し、当時世界第3位の茶の消費国であったことを指摘している⁶⁹⁾。ただしこの数値はロシアの茶の輸入量に比べてかなり少ない。ここで1890年代以降のロシアの白毫茶、磚茶別の輸入量データを参照しよう（グラフ2）。



グラフ 2 帝政末期の茶の輸入量

出典：M.E.Синюков, *Чай и наша чайная проблема*, Петроград, 1915, С.16.

上記グラフが示すように、1892-1902年における茶の輸入量は増加が続き、1904-05年の減少後、1906年の急増を経て、再び減少に転じた。1904-05年の減少には日露戦争が影響しているが、1910年以降の減少には漢口のロシア人経営による製茶工場の火事が影響した⁷⁰⁾。

戦争と茶消費の関係についての分析は次節で行うが、このグラフから分かるように、全体的に白毫茶の輸入が磚茶を上回っている。これは先に挙げた1889年のゼムラーのデータとは傾向が異なっている。ただし磚茶の輸入割合は50%以下でも、該当期間のほとんどの年で40%強を占めている。データ提供者のM.E.シニョコフによると、年間約150万プード(≒24,570t.)もの磚茶をシベリア先住民とキルギス人、タタール人などのチュルク系民族が消費したという(ただしどの年かは明示されていない)。シニョコフはデータを検討したうえで、沿ヴォルガ河諸県住民とシベリアの白毫茶を消費する層にも、磚茶が浸透し始めたと推測している⁷¹⁾。

以上のように、1860年代以降のロシアには陸・海両方のルートから茶が輸入されたことに加え、ロシア人製茶業者の中国進出により国内の磚茶消費が伸びたことも、輸入を促進した要因と言える。茶の効能を解説する専門書・パンフレットの登場は、こうした茶貿易の変化を後押ししたのではないだろうか。

4. 1880年代以降の禁酒運動と第1次世界大戦

4-1. 禁酒運動の再生

19世紀にロシアでアルコール問題が顕在化したことはすでに述べたが、その高い死亡率から知識人を中心に問題解決の緊急性が叫ばれた。農村医療に従事したゼムストヴォ（地方自治組織）の医師Ф.Ф.エリスマン（1842-1915）は、「民衆のアルコール中毒との戦いにおけるゼムストヴォ医師の役割」という論文の中で、医師は医学的健康理解において地元住民に対し一定の影響力を持つこと、アルコールにまつわる汚職や人々の様々な問題に向き合うことの必要性を主張した⁷²⁾。

こうした問題意識の中から、ロシアにおける禁酒運動が再生していった。この時期の禁酒運動は1858-59年の農村禁酒運動のような自然発生的なものではなく、知識人、教会聖職者が自覚的に取り組み、広範囲にわたる運動であった。この運動に関わった医師A. M. コロヴィンは、「ロシアにおける禁酒運動。1899年12月8日付アルコール中毒委員会のA.M. コロヴィン報告」の中で、興味深いデータを挙げてロシアのアルコール問題の深刻さを指摘している。この報告によると、当時モスクワ県ボゴロディンスキー郡の農民家計はパンに32.6%、アルコール飲料に24.1%、砂糖製品に9.4%、魚に8.4%、肉に7.3%を支出していた⁷³⁾。つまり、この地域の農民家計の約1/4をアルコール支出が占めていた。さらにコロヴィンは、ヨーロッパ・ロシアにおいて、1870-1887年の17年間で事故・殺人などによる死者が363,085人であり、このうちアルコール過剰摂取による死者は85,200人（約23.5%）、溺死124,000人（約34.15%）であること、溺死にはアルコールの酩酊による死亡が少なからず含まれていることを指摘している⁷⁴⁾。こうしたアルコールによる死亡率が最も深刻だったのは労働者と農民層であった。

こうしたアルコール問題への取り組みと茶の結びつきは、1890年代の公衆への啓蒙活動の中で促された。E. レインボト『茶とその効用。勅令承認委員会国民講座』（1893、第3版）は次のように解説する。「居酒屋（トラクティル трактир）の1杯の茶は体に活力を与えてくれる、それは他の食べ物と同じである。茶を多く飲めば必要な食べ物もそれだけ減る。茶葉は体に栄養を与えるだけでなく、刺激を与える。こうした刺激はウォッカも相当量与えてくれる。グラスでウォッカ1、2杯なら気分が良くなって元気になるが、その後に体も頭も無力になる。茶はウォッカのような刺激はなく、たくさん飲んでも適度な刺激である。茶は飲んでも弱ったり、ウォッカを飲んだ時のように手足の感覚がなくなったりしない。茶は体を潤し、鎮静化し、気分を高揚させる。頭が軽くなってすっきりする。・・・労働者が働く前の休みや休憩時間にウォッカを1杯飲んで温まるのがいいのは分かっているが、4、5杯となると仕事の役に立たなくなる。労働者にとってはウォッカの代りに茶を飲む方がはるかにいい。・・・」⁷⁵⁾

茶が食べ物の代りになる、という認識は1850年代以降のイギリス労働者階層の生活に見られた茶の位置づけとよく似ている。またアルコールの効能と害悪を茶と比較した上で、労働者にとっての有益な飲み物は茶だと説明しているのである。少なくともこの時期には、茶がアルコールに代わりうる有効な飲料として意識されていたことが伺える。

それではロシアの禁酒運動が再生した時期はいつ頃だろうか。先に触れたアルコール問題の専門家アファナシエフは、ロシアの禁酒運動が1880年代から始まったと指摘する⁷⁶⁾。彼の著書『世界的発展期におけるロシアの禁酒運動。1907-1914年：社会を健康化する試み』（2007年）は、この活動の概要に触れている。例えば、初期の禁酒協会の一つは1882年7月にスモレンスク県ベリスキー郡

タテヴォ村というところで教育家 C.A. ラチンスキーという人物により 1 年期限で組織され、彼の教え子たちを集めて教会で誓約の儀式を行った。協会は 1 年ごとに更新され、会員も 50-70 人程度だったが、1888 年 9 月 25 日に近隣農民 7 人がラチンスキーの元を訪問してから状況が一変した。農民たちは禁酒協会に加わりたいたとラチンスキーに述べ、以後日曜日にも、祝祭日にも、周辺で酒を飲むことが一切なくなった。最初は地方の教育者による細々とした禁酒運動だったが、周辺農民の自発的な参加によって、一気に組織が拡大したのである。ラチンスキー自身はその後『ロシア報知』などの雑誌に積極的に禁酒運動の活動を投稿し、同時代の知識人から賛同を得た。

スモレンスク県で見られたような禁酒運動は 1890 年代以降に他の地域でも活発化した。この時期の禁酒運動の特徴は、1858-59 年の時と異なり暴力活動を伴わず、長い時間をかけて教会との協力関係の下で発展したことである。その後の禁酒協会の増加は目覚ましく（表 2）、その持続性がロシアにおける禁酒運動をより実践的なものにし、地方農村と都市への定着を促した。

(表 2) 1911 年までのロシアにおける禁酒協会数⁷⁷⁾

設立年	合計	合計に対する割合 (%)
1900 年以前	461	26.1
1900-1905	309	17.5
1906	64	3.6
1907	84	4.8
1908	140	7.9
1909	251	14.2
1910	458	25.9
1911 年までの合計	1767	100

アフアナシエフによると、1911 年までに禁酒協会に加入した会員数はロシア全土で 524,362 人に上った。また協会活動は市の施設や農村の教会、学校（日曜学校含む）、図書館といった建物だけで行われたのではない。「ダンスの夕べ」「家族の夕べ」「バザー」といった行事でも積極的に行われた。禁酒運動が当時のロシアの人々の生活に広く浸透していたことが、多様な活動の場からも伺える。

さらに数は少ないが、「喫茶店（チャイナヤ чайная）」も禁酒協会の活動の場に入っていた。先述のように、ロシアでは通常居酒屋で茶を提供しており、ヨーロッパのようなコーヒーハウスは存在しなかった（図 3 を参照）。しかし帝政末期に至り、ようやく茶を専門に提供する施設がロシアでも僅かながら出現した。H.И. グリゴリエフは『ロシアの禁酒協会、その組織と活動 1892-93 年』（1894）の中で、都市に喫茶店や食堂を開く場合は、市庁、県庁の許可が、村、郡に開く場合はゼムストヴォの許可が必要であること、しかし喫茶店や食堂を閉店する場合は慈善事業の喫茶店・食堂を開くときと同じく様々な税から解放されるということを説明している⁷⁸⁾。グリゴリエフはこの喫茶店を禁酒協会の活動の一環として触れている。



図3：クストジエフ画「モスクワの居酒屋」1916年（トレチャコフ美術館所蔵）

画像出典：“Московский трактир, Кустодиев, 1916”, *Музей Мира*, URL : https://muzei-mira.com/kartini_russkih_hudojnikov/1407-moskovskiy-traktir-kustodiev-1916.html

上の絵は制服を着た辻馬車御者たちが居酒屋で休憩がてら茶を飲む様子を描いたもの。帝政ロシア末期の庶民の生活を描いたクストジエフ（1878-1927）の絵画には、老若男女、富裕層・貧困層を問わず茶を飲む人々の様子がしばしば描かれ、その独特な色使いと筆致で当時の様子を生き生きと伝えている。

ただし、禁酒運動と喫茶の関係がより明確に表れたのはむしろ軍隊であった。その動きが本格的化するのには日露戦争後である。

4-2. 軍隊における茶と消費の変化

グラフ2で日露戦争時の1904-1905年に茶の輸入が減少したことについて触れた。この時期の輸入減少は日本とロシアの衝突による海路輸送の途絶によるものであり、軍隊における茶の供給は減少していた。1905年のパンフレットによると、すでに「下級兵士には（茶の）販売割り当てがない」状態であった⁷⁹⁾。ところがまさにこの時期に、軍隊で磚茶の普及が進んだことが指摘されている。シニュコフによると、それまで紅茶の磚茶を飲んだこともなかった人々が、軍隊の中で「必要に迫られて」磚茶を飲むことを知ったという⁸⁰⁾。

すでに軍隊において茶は兵士の必需品となっていが、日露戦争で茶の供給が減る中、軍隊生活における娯楽、遊興の場を求める兵士たちは、兵曹に設けられる「喫茶店」に気晴らしを求めている。しかし茶の供給そのものが減少したことで、飲みなれない磚茶も消費対象になったようである。こ

うした状況については同時期にサラトフの軍隊でコチェルギンが刊行したパンフレット『兵士の必要なもの』（1905）でも述べられており、そのうえでコチェルギンは兵士生活の改善策を提案している。曰く、兵曹の喫茶店は各兵士が茶を「楽しみ」、蓄音機を聞き、シャシキ（西洋碁の一種）などに興じることが可能であるようにつくられねばならない、と⁸¹⁾。

このように、戦時の茶の供給問題は軍隊の兵士の生活を直撃した。前節のグラフ2で示されているように、1806年における茶の総輸入量は増加に転じているが、それ以上に際立っているのが、日露戦争前より磚茶輸入量とその比重が増加していることである。このデータからも、日露戦争後に磚茶を消費する購買層がロシアで拡大したと推測される。

一方、ロシアの禁酒運動は1900年代にピークを迎え、ヨーロッパ、アメリカの運動とも連動していた。そうした中、軍事当局が1908年12月30日の法令を發布し、下級役職の兵士にウォッカ1杯の支給を停止すること、兵士用の売店や食堂でアルコール度の高いスピリッツを販売することを禁止した。またロシア正教会の統括機関である宗務院（シノド）では、神学セミナーの1909-10年度の学期において、反アルコールの啓蒙活動を行うこと、司祭としての禁酒活動への準備を決定した⁸²⁾。この時期の禁酒運動は議会を含めて社会全体で盛り上がっており、軍隊生活における茶の重要性は高まったと推測される。

つまり、日露戦争はロシアの軍隊と茶の関係をより密接にし、ロシアにおける茶の嗜好変化にも一定の影響を及ぼした。しかしグラフ2を見ると、1910年以後、茶の輸入が再度減少している。これはすでに述べたように、漢口工場の火事によるロシア製茶工場の操業停止が影響している⁸³⁾。しかしそれ以上に深刻であったのは、1911年の辛亥革命による中国の混乱である。このため漢口の製茶工場は打撃を蒙ったが、1913年には回復し、ロシアに輸入された磚茶は1,828,000プード（約29,942.64t）に上った。

K.B. カッツのデータによると、1913年ロシアに輸入された茶は75,807t. であり、これはグラフ2で示されている1908年の輸入量4,883,000プード（≒79,983.54t）に近い⁸⁴⁾。この時点でロシアは世界第2の茶の輸入国となっており、しかも興味深いことに1人当たりの茶の消費量はヨーロッパ・ロシアよりもシベリアの方が多かった（表3参照）。

（表3）ロシアにおける地域別・都市別の1人足り茶消費（1913）⁸⁵⁾

① 地域別

	ヨーロッパ・ロシア	トゥルケスタン	西シベリア	東シベリア
1人当たり茶の消費量 (kg)	0.29	1.27	1.23	2.95

② 都市別

	モスクワ	トゥーラ	サラトフ	バクー
1人当たり茶の消費 (kg)	2.05	0.82	0.61	0.82

表3のデータから分かることは、この時期のロシアの1人当たり茶消費量は地域別・都市別でかなり異なっており、都市別ではモスクワの消費量が抜きんでているが、それでもヨーロッパ・ロシア全体の消費量は東シベリアを下回っているということである。ヨーロッパ・ロシアの農村部ではまだまだ茶の消費量は多くなかったと考えられ、一方で東シベリアの住民はより茶に慣れ親しんでいた様子が浮かび上がる。しかもロシア全体の1人当たり茶消費量はイギリス（1人当たり2.93kg）よりもはるかに少なかった⁸⁶⁾。

このような細かいデータが出てくるのは20世紀初頭であるため比較が難しいが、1901年からロシアの1人当たり茶消費量は増加しており、輸入量の推移と連動していた⁸⁷⁾。しかし第1次世界大戦前夜のロシアにおいても茶消費には大きな地域格差が存在し、輸入が増加しても高関税が維持されていたため、1人当たりの消費が伸びない地域が存在した。19世紀にはこうした地域格差がさらに顕著だったと推測される。

第1次世界大戦中は軍隊で茶が供給され、そのことが1917年の戦時経済の中で漢口におけるロシア船の関税取引額増加に反映されたと考えられるが、残念ながらこれを傍証できるデータは少ない。確かなことは、第1次世界大戦とロシア帝政の崩壊、中国内戦による混乱の中、中国からロシアへの茶の輸出が1918年以降著しく減少したであろうということである。中国の茶の生産量は1920年時点で1910年の約5分の1の水準に落ち込み、代わってインドとセイロンが新たな茶の生産地域として台頭した⁸⁸⁾。漢口で活動していたロシアの茶商人系も、革命によって資産を接収され、その施設が破壊の対象となった。これにより、ソ連政権は中国ではなく新たな輸入先としてインドなど他の生産諸国との貿易関係を構築していくことになった。

結論

以上、主に19世紀から20世紀初頭にかけてのロシアの茶の需要と社会運動の関係を概観した。茶は国庫の税収を担う商品として常に高関税がかけられ、そのためイギリスなどとは異なり19世紀後半以降も庶民の手に届く価格では販売されていなかった。にもかかわらず、農村部においても茶の潜在的需要は大きく、そのため茶そのものではなく、茶を効率的に沸かして客人をもてなせるサモワールが早くから普及した。これは消費する立場から見れば、茶が高価であるから需要がなかったというわけでは決してなく、むしろ茶が非常に需要の高い商品であったことを示しているのではないだろうか。そのため、代用茶の生産や密輸が盛んとなり、政府、茶貿易業者との衝突が起こったと考えられるのである。

一方で、19世紀には酒の国庫専売制度によってそれまで目立たなかったロシアのアルコール問題が社会的に顕在化した。専売制度の解消には政府、酒専売業者らによる抵抗が大きかったが、農村の自然発生的要求により、1858-59年に最初の農村禁酒運動が発生した。これは酒の専売制度によって従来の慣習(祝祭日のみ飲酒するなど)を破壊されるようになった農民からの一つの反応だったと思われる。しかしこの時期の禁酒運動は草の根運動的で組織が弱かったこと、茶がまだ高価だったことなどから、アルコールに代わる飲料としての茶は意識されなかった。

茶がアルコール問題の解決法として知識人に意識され始めるのは茶の西部国境輸入、海路輸入が解禁される1860-70年代以降である。1870年代、茶が労働者の食事にまで入り込むようになり、ようやく茶の効能と、アルコール消費の害悪とが結びつけて語られるようになった。また1880年代にアルコールを貧困問題の原因と考える禁酒運動が再生したことで、茶をアルコールに代わる有益な飲料と見なす啓蒙書の刊行も促された。禁酒運動は知識人、教会が関わる自発的で広範囲の運動となり、自ら喫茶店(チャイナヤ)を活動の場とする組織も存在した。

こうした社会運動の発生と並行して、ロシア軍への茶の供給を積極的に行ったのが、漢口に進出したロシア人製茶業者たちであった。彼らは磚茶からタブレット茶を開発することで、携帯に便利

な茶をアピールし、これが軍隊でも採用された。また日露戦争は、白毫茶しか慣れていなかったヨーロッパ・ロシアの消費層にも磚茶が普及する契機となった。これは漢口で磚茶を多く生産するロシア人製茶業者にとっても、非常にタイミングが良かったことだろう。

このように、第1次世界大戦前夜のロシアの茶の需要は、単なる輸送ルートの変化や政府の関税政策といったハード面での条件だけに規定されたわけではなく、農村禁酒運動のような社会の自発的運動、知識人による茶の効能の解明と啓蒙、中国におけるロシア人製茶業者の生産活動など、各方面からの働きかけによって影響を受けた。その意味で、ロシアの茶は初めから国民的「伝統飲料」だったのではなく、近代ロシアの社会的変化とともに国民的飲料へと育てられた、と言えるのではないだろうか。

注

- 1) В.В.Похлёбекин, *Чай и водка в истории России*, Красноярск, 1995, С.20.
- 2) 白毫茶は白いうぶ毛のような毛茸（もうじ）で表面が被われた葉を製茶した高級茶で、あまり発酵させずに撚って乾燥させているのが特徴である。その形状から「白毫銀針茶」ともいい、ヨーロッパでは「ペコー・ティー Pecoe tea」ロシア語では「バイホヴィー・チャイ байховый чай」と呼ばれる。
- 3) 例えば1831年にサンクトペテルブルクで発行された、現地の最新流行品を扱う店の案内パンフレットには、茶の販売店や食器の販売店も含まれ、サモワールと並んでヨーロッパ式の茶器などがリストに掲載されている。В.Кишкин-Жгерский, *Коммерческий указатель Города С.Петербурга, составленный Викентием Кишкиным Жгерским на 1831 год*, СПб., С.15.
- 4) この点に関してはロシア古代文書館(РГАДА)に保管されている数少ないキャフタ税関の史料データから知ることができる。詳しくは、拙著『イルクーツク商人とキャフタ貿易—帝政ロシアのユーラシア商業』北海道大学出版会、2010年、巻末添付表 pp.164-179を参照。
- 5) А.Н.Радищев, Письмо о китайском торговле. (1792), *Полное собрание сочинений А.Н.Радищева, Т.II*, М., 1907, С.87-88.
- 6) И.А. Соколов, А.А.Назукина, *Чай и водка в русском быту второй половины XIX-начала XX века*, М., 2008; И.А.Соколов, *Чай и чайная торговля в Российской империи в XIX – начале XX вв.* (диссертация), М., 2010; И.А.Соколов, *Чай и чайная торговля в России: 1790-1919гг.*, М., 2012; С.А.Рогодко, *История продовольствия России с древних времен до 1917г. Историко-экономический взгляд на агропромышленное развитие Российской империи*, М., 2014.
- 7) 拙論「イルクーツク商人とキャフタ貿易—1792～1830年」『21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア (I)』3号、2004年、pp.1-36; 同「キャフタ貿易に見る露清商人の組織と商慣行」『東北アジア研究シリーズ⑩帝国の貿易』2009年、pp.63-96; 同『イルクーツク商人とキャフタ貿易—帝政ロシアのユーラシア商業』北海道大学出版会、2010年
- 8) 拙論「モスクワ商人とキャフタ危機—公文書が示す—19世紀露清貿易の構造と変化」『ロシア史研究』第100号、2017年、pp.119-144; 同「1860年代以降におけるロシアと清の茶貿易—モスクワ、キャフタ、漢口を結ぶ流通の視点から」『北東アジア研究』別冊第4号、鳥根大学北東アジア地域研究センター、2018年、pp.101-124.
- 9) А.П.Субботин, *Чай и чайная торговля в России и других государствах, Производство, потребление чая*, СПб., 1892, С.193; 拙論「モスクワ商人とキャフタ危機—公文書が示す—19世紀露清貿易の構造と変化」p.137.
- 10) К.В.Кац, *Чая-кофейные суррогаты и диетические продукты*, М., 1930, С.7.
- 11) 『大正八年 漢口日本商業會議所年報』漢口日本商業會議所、大正八年(1919年)、p.25.
- 12) А. Л.Афанасьев, *Трезвенное движение в России в период мирного развития. 1907-1914 годы: опыт оздоровления общества*, Томск: ТУСУР, 2007, 196С.
URL: http://www.literatura.tvereza.info/01/Afanasyev/td1907-1914_ru.html

- 13) Л.В.Бритенкова, Н.В.Григорьева, С.П.Калиничев (сост.), В.И.Гришецкий (ред.), *Самовары России*, М., 2009, p.118.
- 14) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt, A Social and economic history of food and drink in Russia*, Cambridge University Press, Cambridge, London, New York, New Rochelle, Melbourne, Sydney, 2008, pp.242-243. (First published in 1984); R.E.F. スミス /D. クリスチャン著、鈴木健夫・豊川浩一・斎藤君子・田辺三千広訳『パンと塩 ロシア社会経済史』平凡社、1999年、pp.328-330.
- 15) Л.В.Бритенкова, Н.В.Григорьева, С.П.Калиничев (сост.), В.И.Гришецкий (ред.), *Самовары России*, С.122.
- 16) С.П.Калиничев, А.Ю.Ниховский, С.Б.Бажаров, Н.Б.Григорьева, *Энциклопедия старого быта*, Т.1, М., Хобби Пресс, 2012, С.106, 107.
- 17) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt, A Social and economic history of food and drink in Russia*, p.240.
- 18) Л.В.Бритенкова, Н.В.Григорьева, С.П.Калиничев (сост.), В.И.Гришецкий (ред.), *Самовары России*, С.38-39.
- 19) A. de. Coustin, *Per.s fr. pod red. V.Mil'chinoi, Россия в 1839 году. Т.I. М.*, 1996. С.317. cf. И.А.Соколов, *Чай и чайная торговля в Российской империи в XIX-начале XX веков*, М., 2012, С.33.
- 20) И.А.Соколов, *Чай и чайная торговля в Российской империи в XIX-начале XX веков*, С.34-35.
- 21) А.П.Субботин, *Чай и чайная торговля в России и других государствах, Производство, потребление чая*, С.193.
- 22) 西ヨーロッパと異なり、ロシアには「コーヒーハウス」に当たる施設はなく、主に居酒屋（タヴェルナ、カバーク、кабак）で茶が提供された。いわゆる喫茶店（チャイナヤ чайная）に当たる施設が開店するようになるのは、後述のように19世紀末である。
- 23) Т.А.Федсеева (Автор-сост.), *Выпей чайку, Забудешь тоску*, М., 2006. С.22.
- 24) Н.К.Крит, *Материалы для обсуждения вопросов чайной торговли*, СПб., 1864, С.2, 4-5.
- 25) А.П.Субботин, *Чай и чайная торговля в России и других государствах, Производство, потребление чая*, С.461.
- 26) 本節は拙論「モスクワ商人とキャフタ危機—公文書が示す一九世紀露清貿易の構造と変化」『ロシア史研究』第100号、2017年、pp.129-132から情報を援用した。
- 27) ロシア・アメリカ会社はもともとカムチャツカ半島、千島、アリューシャン列島、アラスカにかけて、北太平洋の毛皮事業を行なうために毛皮商人の資本が統合して設立された半官・半民会社である。同社は管轄地域で獲れたラッコ、アザラシ、ホッキョクギツネなどの毛皮をキャフタに運んでいたが、毛皮の枯渇とともに露清貿易の重心が茶と繊維工業製品に移ってきたため、茶貿易に参入した。
- 28) РГИА, Ф.18. Оп.5. Д.695, Л.1, 8.
- 29) РГИА, Ф.18. Оп.5. Д.695, Л. 27-об., 31-об., 33-об. カザンは1552年にロシアに征服された旧カザン・ハン国首都。ロシア併合以前からヴォルガ水系などを通じてロシア、ペルシアを結ぶ交易で栄え、ロシア併合後はヨーロッパ・ロシアとシベリアを結ぶ中継交易地となった。カザン商人はタタール人家系を中心にキャフタ貿易に参入し、茶も取引していた。
- 30) А.П.Субботин, *Чай и чайная торговля в России и других государствах, Производство, потребление чая*, С.192; И.А.Соколов, А.А.Назукина, *Чай и водка в русском быту второй половины XIX-начала XX века*, М., 2008, С.36-37.
- 31) РГИА, Ф.1152, Оп.4, Д.81, Л.2-88.
- 32) 拙論「モスクワ商人とキャフタ危機—公文書が示す一九世紀露清貿易の構造と変化」『ロシア史研究』第100号、2017年、pp.129-132.
- 33) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt*, pp.88-89; R.E.F. スミス /D. クリスチャン著『パンと塩 ロシア社会経済史』 pp.127-128.
- 34) А.Л.Афанасьев, *Трезвенное движение в России, Европе, США как движение за самосохранение человечества (XIX в. - 1914 г.)*, *Социологические исследования*, 1997, № 9, С.119.
- 35) 下斗米俊行『『ロシアにおける居酒屋の歴史』作者イヴァン・ブルイジョフに関するロシア語文献概観』

- 『上越教育大学研究紀要』第16巻第2号、1997年、pp.639-650.
- 36) В.В.Похлёбекин, *Чай и водка в истории России*, С.208.
- 37) В.В.Похлёбекин, *Чай и водка в истории России*, С.210.
- 38) エカテリーナ2世はそれまで境界線が曖昧であった農村の商業農民と都市の商人身分の規定を厳格化し、都市身分の育成とフランス式「第3身分」の創出を狙って1775年、1785年に勅令を出した。これにより、商人は「ギルド」に登録すること、一定の資本金額を申告すること、資本額に応じた税金を納めることが義務付けられた。都市で商人ギルドに登録しない者は町人か同業組合業者に分けられ、かつての中小商人の大部分が町人となった。
- 39) В.В.Похлёбекин, *Чай и водка в истории России*, С.210-212.
- 40) В.В.Похлёбекин, *Чай и водка в истории России*, С.212-214.
- 41) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt*, pp.309-311; R.E.F. スミス /D. クリスチャン著『パンと塩 ロシア社会経済史』 pp.419-423.
- 42) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt*, pp.303; R.E.F. スミス /D. クリスチャン著『パンと塩 ロシア社会経済史』 pp.412-413.
- 43) В.В.Похлёбекин, *Чай и водка в истории России*, С.214.
- 44) А.Л.Афанасьев, Трезвенное движение в России, Европе, США как движение за самосохранение человечества (XIX в. - 1914 г.), С.120.
- 45) В.А.Федоров, Крестьянское трезвенное движение 1858-1859 гг., *Революционная ситуация в России в 1859-1861 гг.*, М., 1962. cf. «Трезвенное движение», *Российские универсальные энциклопедии Брокгауз-Ефрон и Большая Советская Энциклопедия объединенный словарь*, URL: <http://gatchina3000.ru/great-soviet-encyclopedia/bse/111/940.htm> (最終閲覧: 2019.02.03. 20:41)
- 46) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt*, pp.325-326; R.E.F. スミス /D. クリスチャン著『パンと塩 ロシア社会経済史』 pp.444-445.
- 47) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt*, pp.236; R.E.F. スミス /D. クリスチャン著『パンと塩 ロシア社会経済史』 p.326.
- 48) Erika Rappaport, *A Thirst for Empire, how tea shaped the modern world*, Princeton University Press, Princeton and Oxford, 2017, pp. 57-84.
- 49) А.П.Субботин, *Чай и чайная торговля в России и других государствах*, С.476.
- 50) М.Е. Синюковは表1で示されているスポーティンの「紅茶」関税額を「白毫茶」の関税額として扱っている。М.Е.Синюков, *Чай и наша чайная проблема*, Петроград, 1915, С.15.
- 51) М.Е.Синюков, *Чай и наша чайная проблема*, С.15.
- 52) R.E.F.Smith and David Christian, *Bread and salt*, pp.236; R.E.F. スミス /D. クリスチャン『パンと塩 ロシア社会経済史』 p.326.
- 53) 角山栄『茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の社会』中公新書、1980年、pp.22-25, 57-64; 滝口明子『英国紅茶論争』講談社、1996年
- 54) ビアトリス・ホーネガー著、平田紀之訳『茶の世界史 中国の霊薬から世界の飲み物へ』白水社、2010年、pp.63-68; ヴィクター・H・メア、アーリン・ホー著、忠平美幸訳『お茶の歴史』河出書房新社、2010年、pp.182-186.
- 55) И.Ржанов (составитель), *Китайский чай. Подробное описание: его открытия, произрастения, разведения, собирания и приготовления листьев, производства торговли, употребления напитка чаю, свойств его, действий на организм, этикета и политического значения. С присовокуплением статей: о кофе, шоколаде и сахаре, с кратким описанием добывания сего последнего, из свекловицы, домашними простыми средствами. С политическими рисунками: Китайцев, оригинально изображенных, и растений: чаю, кофе, какао и сахарного тростника*, М., 1856, С.36.
- 56) В.Н.Любименко, *Чай и его культура в России*, Петроград, 1919, С.30-33.
- 57) И.Ржанов, *Китайский чай...*, С.37-38.
- 58) これについては拙著「モスクワ商人とキャフタ危機—公文書が示す一九世紀露清貿易の構造と変化」『ロ

- シア史研究』第100号、2017年、pp.119-144. を参照。モスクワ商人を中心とする「キャフタ商人」はキャフタ経由の茶貿易を維持するため、陸路輸送の茶は海路経由の茶よりも品質が良いと主張した。
- 59) А.Н.Хребтов, *Чай: В историко-географическом, ботаническом и физиологическом отношениях: С полтипажем и картою чайных плантации*. СПб., 1873, С.50-51.
- 60) А.Н.Хребтов, *Чай*, С.51-52.
- 61) А.П.Владимиров, *Чай и вред его для телесного здоровья, умственный, нравственный и экономический*, Вильно, 1874, С.12-18.
- 62) А.П.Владимиров, *Чай и вред его для телесного здоровья*, С.18-24.
- 63) この時期ウラジーミロフが刊行した著書には А.П.Владимиров, *Мясной вопрос*, Вильна, 1874; Он же, *За птиц*, 1875; Он же, *Кухня, как путь эмансипации женщин*, Вильна, 1877. (『肉の問題』(1874); 『鳥に関して』(1875); 『女性解放手段としての台所』(1877)) などがあり、その後もロシアの様々な社会問題について膨大な著書を刊行した。
- 64) А.П.Субботин, *Чай и чайная торговля в России и других государствах. Производство, потребление чая*, С.164.
- 65) これを促したのは瑯璪条約(1858)、天津条約(1860)による中国の対外貿易自由化である。
- 66) 1870年代の磚茶輸入量の増加は、湖北省、湖南省におけるロシア商人の製茶工場が主に磚茶を生産したためである。当時のロシア商人の製茶工場ではほぼ職人の手作業で製茶を行っており、技術的にも物理的にも白毫茶の生産を増やすことが困難だった。詳しくは以下を参照: 拙著「1860年代以降におけるロシアと清の茶貿易—モスクワ、キャフタ、漢口を結ぶ流通の視点から」pp.110-116; К.А.Попов, *О чае и его приготовлении русскими в Китае*, М., 1870, С.22-25; *Краткий очерк возникновения, развития и теперешнего состояния наших торговых с Китаем сношений через Кяхту*, М., 1896, С.75.
- 67) ロシア語からの直訳は「板茶」であり、緊圧茶、固形茶ともいう。
- 68) П.А.Пономарев, *Русская фабрика, Плиточный чай первой русской фабрики в Китае, П.А.Пономарева в Ханкоу, испробованный, одобренный и рекомендованный Военным министерством и ординарным профессором Военно-медицинской академии А.Бородиным*, М., 1882, С.5-6.
- 69) Г.Землер, *Чай, разведение его в Китае, Индии, Японии и на Кавказе. Ботанические свойства, приготовление, подделка и всемирная торговля. Сочинение Генриха Землера из Сен-Франфиска*, М., 1889, С.22.
- 70) М.Е.Синюков, *Чай и наша чайная проблема*, Петроград, 1915, С.17.
- 71) М.Е.Синюков, *Чай и наша чайная проблема*, С.17.
- 72) Ф.Ф.Эрисман, Роль земского врача с народным алкоголизмом, В.С.Воровьев (сост.), *Классики русской медицины о действии алкоголя и алкоголизме*, 1988, С.269-280. (初出 1897) URL: http://bib.social/narkologiya_1008/rol-zemskogo-vracha-borbe-narodnyim-11945.html (最終閲覧: 2019/02/07 19:38:00)
- 73) А.М.Коровин, Движение трезвости в России, Доклад Комиссии по вопросу об алкоголизме доктора А. М.Коровина 8 декабря 1899г. URL: https://bookap.info/book/bogdanov_sostavitel_dlya_chego_lyudi_odurmanivayutsya_sbornik/gl9.shtm (最終閲覧: 2019/02/07 20:17:00)
- 74) А.М.Коровин, Движение трезвости в России, Доклад Комиссии по вопросу об алкоголизме доктора А. М.Коровина 8 декабря 1899г.
- 75) Е.Рейнбот, *Чай и его польза. Из народных чтении Высочайше утвержденной Комиссии*, 3-е издание, СПб., 1893, С.30-31.
- 76) А.Л.Афанасьев, *Трезвенное движение в России в период мирного развития. 1907-1914 годы: опыт оздоровления общества*, Томск: ТУСУР, 2007, 196С.
http://www.literatura.tvereza.info/01/Afanasyev/td1907-1914_ru.html 本書はインターネット上で参照しているため、頁数を記載しない。
- 77) А.Л.Афанасьев, *Трезвенное движение в России в период мирного развития. 1907-1914 годы: опыт оздоровления общества*.
- 78) Н.И.Григорьев, *Русские общества трезвости, их организация и деятельность в 1892-93 гг.: Список иностранных обществ трезвости*, СПб., 1894, С.79.

- 79) И.А.Соколов, *Чай и чайная торговля в России: 1790-1919гг.*, М., 2012, С.88.
- 80) М.Е.Синюков, *Чай и наша чайная проблема*, С.17.
- 81) И.А.Соколов, *Чай и чайная торговля в России: 1790-1919гг.*, М., 2012, С.88.
- 82) А.Л.Афанасьев, *Трезвенное движение в России, Европе, США как движение за самосохранение человечества (XIX в. - 1914 г.)*, С.120.
- 83) М.Е.Синюков, *Чай и наша чайная проблема*, Петроград, 1915, С.17.
- 84) К.В.Кац, *Чаяе-кофейные суррогаты и диетические продукты*, С.7.
- 85) К.В.Кац, *Чаяе-кофейные суррогаты и диетические продукты*, С.7-8.
- 86) К.В.Кац, *Чаяе-кофейные суррогаты и диетические продукты*, С.8.
- 87) К.В.Кац, *Чаяетовары (чай, кофе, какао и суррогаты) и сахар*, М., 1927, С.37.
- 88) К.В.Кац, *Чаяетовары (чай, кофе, какао и суррогаты) и сахар*, С.40.

(本学文学部教授)